

中村 哲（なかむら てつ）

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来28年にわたりハンセン病をはじめ貧困層の診療に携わる。1986年にアフガン難民診療チームを発足（のちのJAMS＝ジャパン・アフガン・メディカル・サービス）。以後アフガニスタン国内へと活動を広げ医療過疎地の東部山岳地帯に3ヶ所の診療所を開設。1996年からハンセン病多発地で医療過疎地でもあるパキスタン北西辺境州山岳地2ヶ所で診療を開始。1998年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。2000年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘削 約1600本、カレーズ＝地下水路38ヶ所の復旧）事業を実践。

2001年、アフガニスタンの首都カーブルに5ヶ所の診療所を開設し、旱魃や戦乱による国内避難民の診療を開始。同年10月「命の基金計画」を立ち上げ、同地で餓死線上にあるとされる避難民へ越冬可能な分の食糧配給を行う。2002年2月からアフガニスタン東部で農地回復のため「緑の大地計画」を起こし直径約5mの灌漑用井戸を15基掘削。同地区に試験農場約1ヘクタールを設け乾燥に強い品種の作付けや土壌の改善によって生産量を上げることを目的とした農業事業を始めた。

旱魃が深刻化する2003年3月、総合的農村復興を計画し灌漑用水路掘削を開始。2010年3月、13ヶ所の貯水池＝調整池のある全長25.5キロの水路が開通した。水路最終地点のガンベリ沙漠に約180ヘクタールの土地を確保し試験農場をここに移し現在開墾中。

水路によって耕作農地が広がるにつれ推定15万人以上の難民が帰還した。進行中の旱魃で洪水と渇水に翻弄される既存用水路取水口の水門や堰の新設、改修にも携わりナンガラハル洲の穀倉地と言われる地を救い大勢が帰農した。難民の帰還に伴いアフガン農村社会・地域共同体のモスクとマドラサ（伝統的な寺小屋式教育機関）を建設し同年2月完工し地域住民へ譲渡した。

年間診療数約4万人（2010年度）

著書・編著

『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』『辺境で診る、辺境から見る』『空爆と「復興」』『医者用水路を拓く』（以上石風社）『アフガニスタンの診療所から』（ちくま文庫）『アフガニスタンで考える』『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』（以上岩波書店）『医者よ信念はいらない まず命をすくえ』（羊土社）など